

英語の軽動詞構文の軽動詞と
ゼロ派生名詞の意味的貢献度をめぐって
— 認知文法から見た軽動詞とゼロ派生名詞の「協働」の観点から — *

對馬 康博

1. はじめに

小稿は、英語の「軽動詞構文(light-verb construction)」と呼ばれる言語現象を認知言語学(Cognitive Linguistics)、特に、Ronald W. Langackerの提唱する認知文法(Cognitive Grammar)の観点から共時的視点をもって考察し、軽動詞とゼロ派生名詞が構文全体の意味に及ぼす貢献度について明らかにすることを主たる目的とする。

まずは、次の例を見よう。

- (1) a. Mary had a walk in the garden.
b. Mary walked in the garden.
- (2) a. John took a kick at the ball.
b. John kicked at the ball.
- (3) a. Mary gave John a punch.
b. Mary punched John.

(Dixon 2005: 459)

(1a, b)は「メアリーが庭を散歩した」という意味であり、(2a, b)は「ジョンがボールを蹴った」という意味であり、(3a, b)は「メアリーがジョンを殴った」という意味である。従来の研究では、aタイプには、have, take, giveなどの意味的に軽い「軽動詞(light verb)」が用いられていることが指摘されており、本稿では、便宜的にこのタイプの文を「軽動詞構文」と呼ぶことにする。^{1 2}

軽動詞構文に関する先行研究として、伝統文法や記述文法では、時代順に Poutsuma (1926), Curme (1931, 1935), Jespersen (1949), Quirk et al. (1985), Huddleston and Pullum (2002) などがある。これらの研究では、特に、軽動詞をめぐる記述が多くなされている。軽動詞とは、詳しくは第2節に議論を委ねるが、簡素に言えば、意味的に軽い動詞ということになる。また、特に意味論に基づく分析として、Wierzbicka (1988), 相沢(1999), 村田(2005), Dixon (2005)をはじめ多数の分析がある。これらの研究では、上のaタイプの軽動詞構文とbタイプの本動詞文の意味的・機能的な違いを論じるものが多い。

従来の研究を受けて、軽動詞構文の形式は、次のように一般化できる。

(4) have タイプ軽動詞構文:

SUBJECT have a ZERO-DERIVED NOUN

take タイプ軽動詞構文:

SUBJECT take a ZERO-DERIVED NOUN

give タイプ I 軽動詞構文:

SUBJECT give INDIRECT OBJECT a ZERO-DERIVED NOUN

give タイプ II 軽動詞構文:

SUBJECT give a ZERO-DERIVED NOUN

ここでいう ZERO-DERIVED NOUN (ゼロ派生名詞) とは、動詞から形を変えずに転換した名詞である。そのため、この名詞は、対応する動詞がもつイベント内容を内包する「出来事名詞(eventitive noun)」に相当する(cf. Quirk et al. 1985)。

また、軽動詞構文の意味に関しては、さまざまな考察があるが、ごく簡素にいうと、「主語の実体がゼロ派生名詞で表される出来事を実現する」

という意味である。つまり、述部の中心的意味は出来事を表すゼロ派生名詞の側にあり、軽動詞は構文全体の意味にそれほど貢献していないというのが従来の分析である。よって、軽動詞構文は、(bタイプのような)ゼロ派生名詞の基となっている動詞を述語として表す本動詞文と意味的にパラレルな関係があるものとして扱われてきている。

では、本当にそのようなパラレルな関係が成立するのだろうか。Bolinger (1977)による「形が違えば意味も違う、意味が違えば形も違う(“one form for one meaning, and one meaning for one form”)」というテーゼを採用する近年の認知言語学の立場に立脚すれば、(1)-(3)のそれぞれのaとbの意味は「異なる」ものになるはずである。特に、軽動詞構文のバリエーションには、haveタイプ、takeタイプ、giveタイプなどがあるが、これらの構文で用いられている動詞の意味は、文法化(grammaticalization)に伴い本来の語彙的意味が希薄化し、意味的に軽く、本当に構文全体の意味にはほとんど貢献していないのだろうか。以上が本稿の研究の着想の経緯である。

本稿の構成は以下の通りである。第2節では、従来の先行研究に基づき、軽動詞の意味・機能について確認する。第3節では、本研究で採用する認知文法の理論的道具立てを紹介する。第4節が本稿の主要部であり、軽動詞構文の統語的・意味的考察に基づいて、認知文法の観点から、それぞれの軽動詞構文の意味構造を明らかにする。また、軽同土構文が互いに関連し合って緩やかなネットワークを形成していることを論じる。さらに、軽動詞構文の軽動詞とゼロ派生名詞が構文全体の意味に及ぼす貢献度について考察する。第5節は結語である。

2. 軽動詞の意味・機能

前節で概観したように、伝統文法や記述文法では、軽動詞構文についての記述や、あるいは、軽動詞構文という名称は用いていなくても、軽動詞自体についての記述が多くなされている。この節では、これらの記述から

軽動詞構文と軽動詞の意味・機能について確認していく。

まず、軽動詞構文と軽動詞に関する記述は、Poutsuma (1926)に見られる。

(5) There is also a marked tendency in Modern English to express a verbal idea by means of a combination consisting of a verb with a vague meaning and a noun of action. The latter is then the real significant part of the predicate, while the former mainly serves the purpose of a connective.

(Poutsuma 1926: 394)

Poutsuma は、曖昧な意味をもつ動詞（つまり、軽動詞に相当）と行為の名詞（つまり、出来事名詞であるゼロ派生名詞に相当）からなる表現形式（すなわち、軽動詞構文）の存在について触れている。特に、ゼロ派生名詞は、述部にとって真に重要な部分であるといい、軽動詞は、接続語としての役割を果たしているという。Poutsuma は現代英語ではなく、近代英語(Modern English)について触れているから、この時代には既に軽動詞構文が存在していたということになる。

次に、Curme (1931, 1935)による指摘を見よう。

(6) There is a marked tendency in English to clothe the chief idea of the predicate in the form of a noun instead of a finite verb. [...] The verbs that are used here in colloquial speech are all of the nature of the copulas [...]. They merely serve to connect the predicate noun, the real predicate, with the subject.

(Curme 1931: 22)

Curme は基本的に先の Poutsuma の流れを引き継いでいる。つまり、述

部の中心はゼロ派生名詞の方にあり、軽動詞は、単に真の述部であるゼロ派生名詞と主語を結ぶ「コピュラ」の性質を有しているにすぎないという。さらに、Curme (1935)は、この軽動詞(have, get, do, give, make など)と be 動詞のコピュラについて、次のように述べている。

(7) We feel that have, get, do, give, and make have a little concrete meaning left. They are not quite like the copula *be*. *Be* is intransitive, while *have, get, do, give, and make* are transitive, but they are all copulas, though in different stages of development. Often their main function is, as copulas, to link the predicate noun to its subject.

(下線は著者による) (Curme 1935: 69)

Curme によれば、軽動詞には具体的な(語彙的)意味がほとんど残されていないという。また、他動詞である軽動詞は、自動詞である be 動詞と完全に一緒ではないが、コピュラという点において同じであるという。重要な点は、それらは、発達の異なる段階にあるということである。このことは、文法化の観点からすると、軽動詞と be 動詞はコピュラという点において、文法化の段階が異なっているということを表しているのであろう。さらに、Curme は軽動詞構文について、次のような興味深い指摘をしている。

(8) To English feeling a predicate verbal noun is felt as more concrete and forcible than a pure verb.

(ibid.)

Curme によれば、英国人にとって、(軽動詞構文の)述部となるゼロ派生名詞を用いる方が、対応する本動詞(の構文)を用いることよりも「具体

性があり力強く」感じられるとのことである。

次に、Jespersen (1954)の記述を見てみよう。

(9) [...] ‘light’ verbs. They are in accordance with the general tendency of ModE to place an insignificant verb [...], before the really important idea [...]. [...] Such constructions also offer an easy means of adding some descriptive trait in the form of adjunct [...].

(Jespersen 1954: 117)

Jespersen の記述には、「軽動詞(‘light’ verbs)」という用語が出てくる。軽動詞構文には、付加詞(adjunct)の形で記述的な描写特性を付け加えるという機能があるという。³

さらに、時代を先に進め、最近の英語学の知見が十分に生かされた英文法書の大著である Huddleston and Pullum (2002)を見てみよう。

(10) [...] the underlined verbs (= right verb) are semantically ‘light’ in the sense that their contribution to the meaning of the predication is relatively small in comparison with that of their complement. [...] The main semantic content is not located in the light verb, but in the noun functioning as head of the direct object.

(括弧内は著者による) (Huddleston and Pullum 2002: 294)

Huddleston and Pullum によれば、軽動詞は意味的に軽いといい、それは補部（つまり、ゼロ派生名詞に相当）と比べて、軽動詞の述部への意味的貢献度は比較的小さい(relatively small)という。また、主たる意味的な内容は軽動詞の中にあるのではなく、直接目的語の主要部として機能している名詞（すなわち、ゼロ派生名詞）にあるという。⁴ ここで興味深

いのは、軽動詞の意味について、比較的小さいと述べられているが、少しは意味的な貢献があるのか、あるとすればどういう点であるのか、などについては触れられていないということである。この点についての本稿の見解は第4節で述べることにする。

最後に、英語学に関する辞典類で「軽動詞」について見てみよう。

(11) a. [...] A verb such as *make* in *make a turn* or *take* in *take a look*, whose contribution to the meaning of the whole is less specific than in e.g. *make a table* or *take a sandwich*.

(Matthews 2007: 227)

b. [...] それ自体ほとんど意味内容を持たない動詞 [...]

(寺澤 (ほか) 2002: 377, light verb 頁)

c. come, go, make, be, bring, take, get, give など、統語的には本動詞として振る舞うが、語彙的意味をもたない動詞をいう。

(荒木 (ほか) 1999: 321, light verb 頁)

いずれも軽動詞は、意味内容をほとんどもたないものとして定義されている。上記の記述は英語学に関する辞典類の記述であるから、これまでの英語学研究では、軽動詞はそのように扱われてきたことになる。

以上を踏まえて、従来の研究の記述をまとめると次のようになる。

(12) 従来の研究の「軽動詞」に関するまとめ: 軽動詞構文の軽動詞は、意味的な貢献度が低く、ゆえに、意味的に「軽い」ものである。むしろ、この構文の真の述語は、ゼロ派生名詞にあり、これがこの構文の意味に大きく貢献している。

本稿の軽動詞に関する見解は、第4節で述べることにする。

3. 理論的道具立て—認知文法の基本概念—

3.1 認知と言語

本節では、本稿の分析で採用する「認知文法(Cognitive Grammar)」の基本概念について概観していく。認知文法はRonald W. Langacker (1987, 1991, 2008など)により提唱された理論言語学分野の1つに相当する。

まず、このアプローチでは、人間の「認知の営み(cognitive processing)」の観点から言語の文法に迫ろうと試みる。ここでいう認知の営みとは、カテゴリー化能力、対応関係の確立能力、複雑な概念構造・音韻構造の構築能力、それらの構造を結びつける記号化能力、図・地の分化能力、特定化能力など、といった（言語だけに特化してはいない）一般的認知能力(domain-general cognitive abilities)の処理過程のことを表す。人間は、認知の営みを通じて事態を把握し(construe)、概念化(あるいは言語化)していくという優れた認知作用を有しているわけである。

3.2 知覚作用と概念作用の並行性

こうした認知文法のアプローチでは、認知作用の一環としての知覚作用と概念作用の並行性が強調される。より正確に言えば、知覚作用は概念作用を導く(Perception leads to conceptualization)ものとして捉えられる。この様子は、図1および図2に示されている。図1は、我々の知覚作用を表している。観察者(viewer, V)は、最大視野(maximal field of view, MF)の中で、あるモノを見ようとしている。さらに観察者は、注目しようとする範囲を表す観察フレーム(viewing frame, VF)の中で、焦点を調整して、あるモノに注意の焦点(focus of attention, F)を当てる。図の中では、こうした知覚を通じて捉えようとする様子が矢印付き波線(-->)で示されている。

また、図2は、概念作用を表している。概念化者(conceptualizer, C)は、概念化の最大スコープ(maximal scope, MS)の中で、あるモノを概念化しようとする。さらに概念化者は、概念化に直に関わる直接スコー

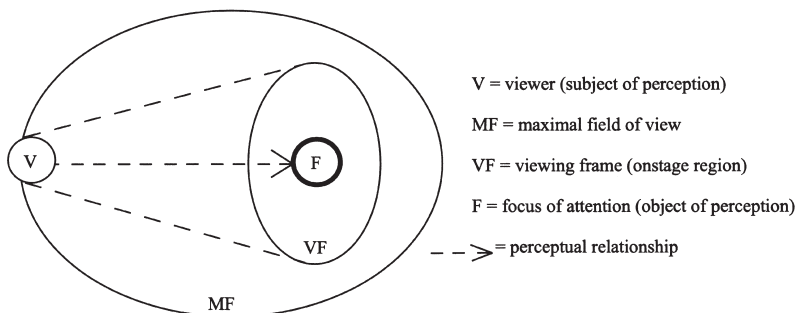


図 1：知覚作用

(Langacker 1995: 155)

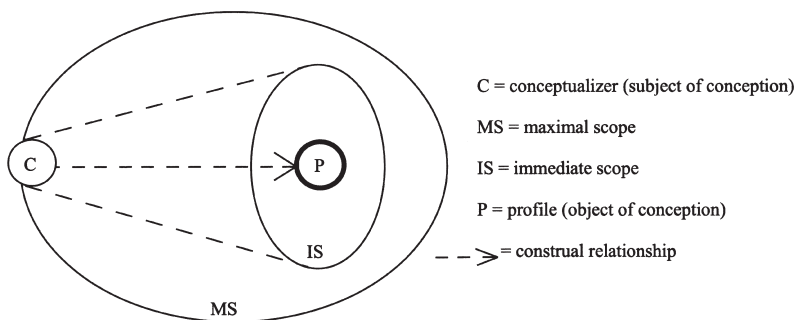


図 2：概念作用

(ibid.: 156)

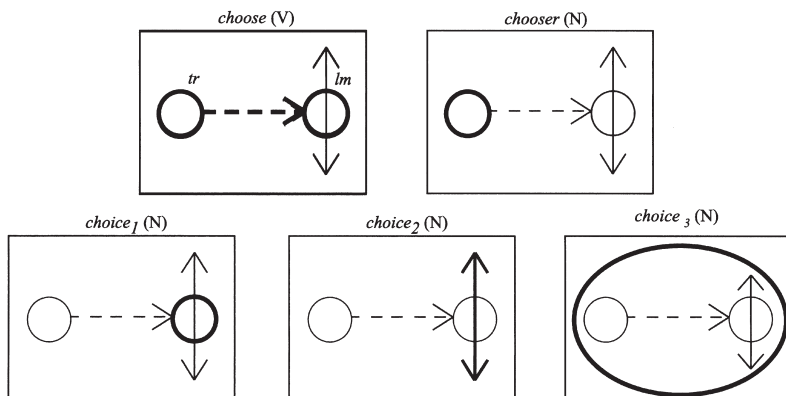
プ(immediate scope, IS)の中で、あるモノを際立たせる（つまり、プロフィールする）(profile, P)ことによって脳内に概念を想起させる。図中では、事態を捉える（あるいは、事態把握する）様子が矢印付き波線(-->)で示されている。

以上のように、知覚作用と概念作用は並行するものであり、私たちの事態把握が言語化の大きな鍵となっている。

3.3 事態把握と品詞

そして、言語のレベルでは、このような事態把握が品詞にも影響を及ぼすことがわかっている。品詞は、私たちがどこに焦点を置くのか、つま

り、どこをプロファイルするのかによって変わってくる。例として、動詞 choose と名詞 chooser, choice について、図3と共に考えてみよう。(図中ではプロファイルは太線で表示されている。)



(Langacker 2008: 100)

図3: 品詞とプロファイルの関係

まず、動詞 choose は tr と付された「選択者」が lm と付された「選択物」を「選ぶ」というプロセスをプロファイルする。一方、名詞 chooser は「選択者」だけをプロファイルしているが、その背後には選択物や選択するというプロセスが存在しなければならない(これを、前景となり際立つことを表すプロファイルに対して、その背景に存在する「ベース(base)」という)。また、名詞 choice にはいくつかの意味があるが、choice₁は「選択物」であり、choice₂は選択範囲、つまり、「選択肢」をプロファイルしている。さらに興味深いのは、choice₃であり、これは「選択(すること)」というプロセスを名詞化したもの、つまり派生名詞に相当する。すなわち、これは、動詞で表していたプロセス全体がひとかたまりに具現化(reification)したモノをプロファイルしたものだといえる。

ここで、動詞とそれを名詞化した派生名詞の認知処理について、次の図

4, 5 と共に考えてみたい。

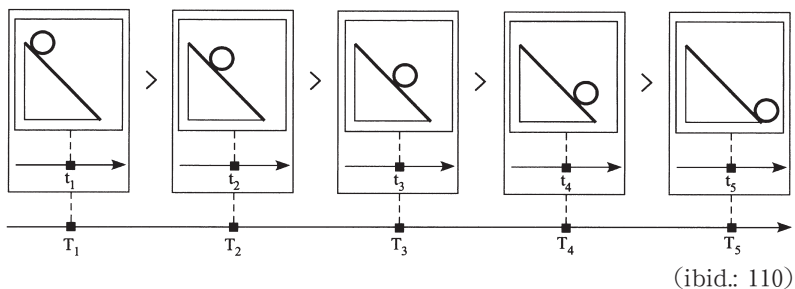


図 4：順次的走査

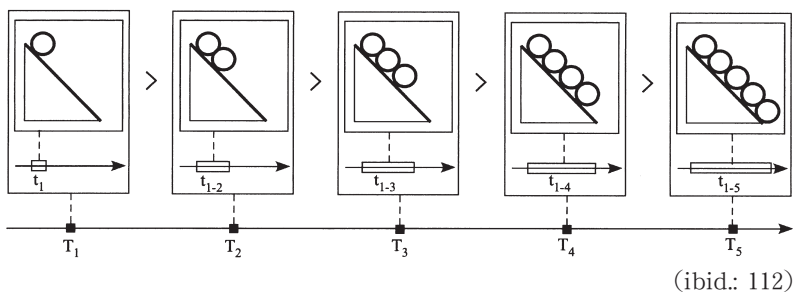


図 5：総括的走査

物事を捉える際に、私たちは（具体的であるにせよ抽象的であるにせよ）その形を心的にたどるという操作を行っている。これを「心的走査(mental scanning)」という。心的走査には図 4 の「順次的走査(sequential scanning)」と図 5 の「総括的走査(summary scanning)」の 2 種類がある。前者は時間と共に、物事を順々にたどっていく走査である。たとえば、図 4 のように、玉が転がるという事象においては、私たちは玉が上から下に転がる様子を順を追ってたどることになる。他方、後者は時間と共に、物事を重ね合わせながらたどっていく走査である。たとえば、図 5 の玉が転がる事象では、私たちは玉が上から下に転がっていく様

子を累積的にたどっていくことになる。言語レベルでは、これらの操作は動詞とそれを名詞化した派生名詞などの品詞にも適用される。具体的には、動詞は順次的操作で捉えられるプロセスであり、その名詞化した派生名詞は総括的操作で解釈されるモノである。特に後者に関しては、先に述べたように、動詞を具現化することによって得られるものであるのもとも動詞で表されていたプロセスが累積的に内在していることになる。

3.4 統合

次に、「統合(integration)」と呼ばれている認知操作について目を向けてみよう。私たちは、全体の部品となる小さな「成分構造(component structure)」を統合して、より大きな「合成構造(composite structure)」を組み上げていくという認知処理を行うことができる。この処理をより詳しく見るために、図6の“near the door”の統合過程を見てみよう。

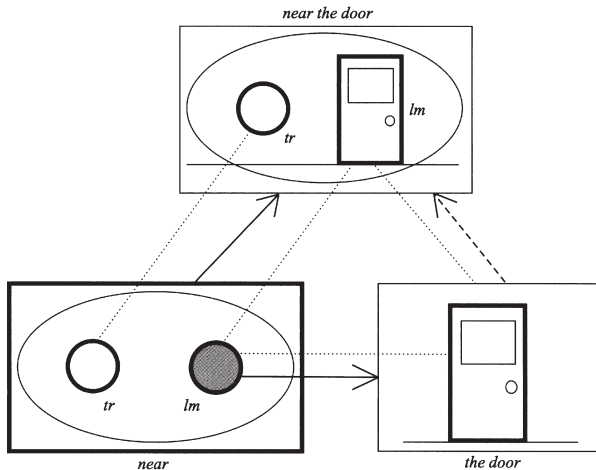
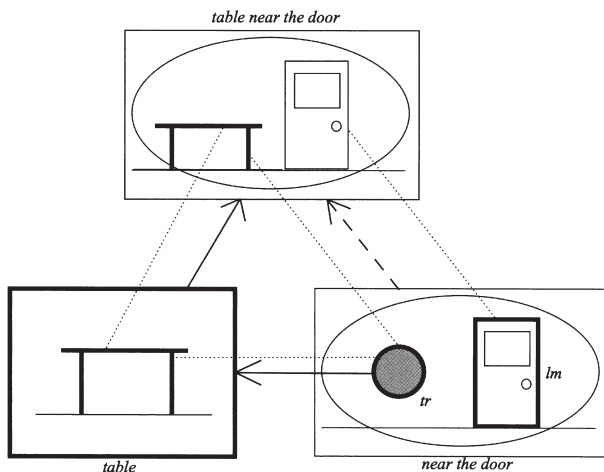


図6: near the doorの統合過程

(Langacker 1995: 163)

まず、図の下部では、全体となる合成構造 near the door を構成する 2 つの成分構造の前置詞 near と名詞句 the door が示されている。ある実体（あるいは物事）(entity)は関係(relation)とモノ(thing)に分けられるが、前置詞は関係を表し、名詞句はモノを表すとされている。ここでの near という関係の中には、1 番際立つモノとしてのトラジェクター (trajector, tr)と 2 番目に際立つモノとしてのランドマーク(landmark, lm)が関与している。前置詞 near は、トラジェクターとランドマークが空間的近接性を示す抽象的な(schematic)関係を表している。そして、この前置詞 near は、統合する際の中心的役割を果たす「プロフィール決定詞(profile determinant)」として働いており、その様子は太線の四角で囲まれることで表わされている。具体的な統合過程に目を向けると、まず、near のランドマークを精緻化(elaborate)（あるいは、具体化）しなければならない。精緻化するモノは網線で表示（精緻化サイト(elaboration site)という）され、ここでは the door というモノで具体化される。この様子は図の下部の矢印付き実線で表示されている。この精緻化を通して出来上がる構造が図の上部の合成構造である。点線はそれぞれの対応関係を表している。図の下部から伸びる矢印付き実線は精緻化を表し、矢印付き波線は拡張化することを示している。統合という認知処理では、基本的にはプロフィール決定詞の意味構造が引き継がれる。そのため、この例の合成構造では、前置詞 near の関係を構成する 2 つのモノ—トラジェクターとランドマーク—のうち、トラジェクターとしての near の関係の意味構造の方が合成構造に引き継がれ、さらに、ランドマークの方が精緻化されて、最終的には near the door という合成構造が出来上がる。

さらに、出来上がった合成構造は、トラジェクターが抽象的構造体(schema)のままであり、これを精緻化して、より高次のレベルの統合が行われる可能性を秘めている。たとえば、これを the table で精緻化すれば、図 7 のような統合過程をもつ table near the door という合成構造が得られる。



(Langacker 1995: 166)

図 7: table near the door の統合過程

このように、私たちは統合という重層的な認知処理を通じて、無数の言語表現を構築していくことができるわけである。ただし、すべての言語表現の意味構造（つまり、出来上がった合成構造）を要素としての成分構造に還元できるわけではないことに注意されたい。この点において、認知文法の統合は、生成文法の併合(merge)とはかなり異なる性質を有している。認知文法では、積み木(building block)のように単なるアルゴリズム的な計算体系に基づいて言語表現が生まれるのではなく、単純な足し算によって生まれない言語表現や意味もあることを想定している。つまり、ゲシュタルトの意味をもつ言語表現の意味構造は、(完全ではない)部分的な合成性に基づく原理によって「創発(merge)」するということになる。たとえば、Kick the bucket! (くたばれ!) のようなイディオム表現は、要素に還元したところでその意味は生まれてこなく、成分構造には分解できないゲシュタルトの意味を有した合成表現であることになる。この点に関する議論は對馬(2017: 87-89)が詳しい。

3.5 カテゴリー化とネットワーク

最後に、カテゴリー化とネットワークについて考えてみよう。図8はカテゴリー化の関係を表している。認知文法では、あるカテゴリーの中で最も典型的な成員を「プロトタイプ（あるいは、典型例）(prototype)」と呼ぶ。また、そのプロトタイプに対して、多くの部分を共有しながらも、一部の性質が異なるものを「拡張例(extension)」という。さらに、プロトタイプや拡張例から共通する性質を取り出した抽象的構造体を「スキーマ(schema)」という。図8はローカルなカテゴリー化を示している。

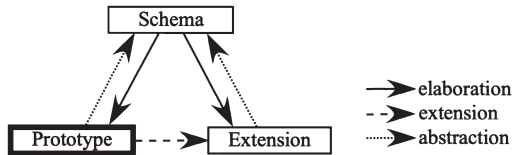


図8：カテゴリー化

(Langacker 1990: 271, 一部改変)

さらに、このようなローカルなカテゴリー化が複合的に生じ、よりグローバルなカテゴリー化へと拡大していったのが「複合ネットワークモデル(complex network model)」である。たとえば、木(tree)のカテゴリー化とネットワークについて、図9と共に考えてみよう。典型的な木というのは、その主要な特性において、幹があり、枝があり、平たい葉があるものと想定される。こうした木が木のカテゴリーのプロトタイプ(TREE)である。例えば、桜の木などがすぐに思いつくだらう。一方、松の木(PINE TREE)というのは、幹や枝があるものの、葉が平たいものではなく、突起状の形状をしている。したがって、松の木は典型的な木とは共有する部分が多いものの、一部の特性は異なっているので、プロトタイプからの拡張例とみなすことができる。さらに、プロトタイプと拡張例から共通する性質を取り出したのがスキーマ(TREE')である。他

方、ヤシの木を考えると、枝がなく、また葉の形状も平たいジグザグ模様をしている。この場合、スキーマ(TREE')からさらに拡張した事例(PALM TREE)というものが想定される。また、このスキーマ(TREE')と拡張例(PALM TREE)から共通性を取り出したものが、高次のスキーマ(superschema)(TREE'')である。この高次のスキーマはさらなる拡張を秘めた柔軟性を有している。このように、私たちが考えるカテゴリーは、ローカルなカテゴリー化からグローバルなカテゴリー化へと拡りを見せる動性を有したネットワークを成しているといえるわけである。

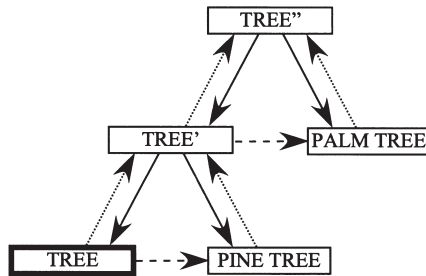


図9: TREEのカテゴリーのネットワーク

(cf. Langacker 1987)

3.6 まとめ

以上のように、私たち人間は、認知の営みを通じて、事態の認知処理を行い、概念化し、さまざまな言語表現へと記号化していることになる。次節では、本節で考察した概念を用いて、英語の軽動詞構文の統合過程やネットワーク化の解明を試みて、さらに、この構文中の軽動詞とゼロ派生名詞が構文全体の意味に及ぼす貢献度について明らかにしていく。

4. 英語の軽動詞構文の統合過程, 合成構造, ネットワーク, そして軽動詞とゼロ派生名詞の意味的貢献度

これからの節では, 第1節でみた英語の軽動詞構文, have タイプ, take タイプ, give タイプ I, give タイプ II の統合過程と合成構造を考察していく。手順として, これまでの先行研究で明らかにされている構文特性を概観し, その特性から統合過程と合成構造の解明を試みる。軽動詞構文に関する先行研究は数多くあるが, 最も良くまとまったものは Dixon (2005)であるため, 構文特性については, これを参照していく。さらに続く節では, それらの構文間のネットワーク関係を解明していく。最終的には, 軽動詞とゼロ派生名詞が構文全体の意味に及ぼす貢献度について明らかにしていく。

4.1 have タイプ軽動詞構文の構文特性と統合過程・合成構造

have タイプ軽動詞構文の構文特性から見ていこう。第1節で確認したように, have タイプの軽動詞構文は, 次のような形式をもったものであった。

(13) have タイプ軽動詞構文:

SUBJECT have a ZERO-DERIVED NOUN

まず, 形式面に関する統語特徴について考察する。Dixon (2005)によれば, haveタイプ軽動詞構文中のゼロ派生名詞は, 派生前の対応する動詞に関して, 自動詞が中心であるという。

(14) a. I had a ride (on the elephant).

b. I rode (on the elephant).

(Dixon 2005: 467)

たとえば, (14a)の have タイプ軽動詞構文中のゼロ派生名詞 ride については, 派生前の対応する動詞は, (14b)のように, 自動詞 ride である。ただし, (15)のように, 派生前の対応する動詞が他動詞の場合もある。その場合, 軽動詞構文中では, 目的語の前に前置詞of, あるいは他の前置詞を置く。

(15) a. John had a bite/smell of the cake.

b. John bit/smell the cake.

(ibid.)

次に, 意味特性について指摘する。Dixon によれば, have タイプ軽動詞構文は, (16a, b)のように, 主語が楽しんでいる(enjoy)行為に「ふける(indulge)」場合やその行為によって「安心感(relief)」が与えられる場合に容認されるが, (17)のように, そうでない場合には容認されないということである。

(16) a. Have a sit-down.

b. Have a lie-down.

(17) *Have a stand-up.

(ibid.: 470)

また, (18)のような「時」の特定化や(19)のような「場所」の特定化に関して, この構文は, (18b), (19b)のように, 主語が「特定の時や場所」で「特定の目的を遂行する, 試みる」という意味のものは容認されないという。

(18) a. I had a walk in the garden after lunch.

b.*I had a walk in the garden from dawn to dusk.

(ibid.: 469)

(19) a. I had a walk in the garden.

b. *I had a walk from Oxford to Reading.

(ibid.)

さらに、意図性に関して、この構文は、(20a)のように、主語が人間で何らかの意志的な(volitional)行為がなされる場合（つまり、動作主読み）は容認されるが、(20b)のように、そうでない場合（つまり、経験者読み）は容認されないという。また、この構文は、(21)のように、主語のその場で思いつく動機(the spur of the moment)や思いつき(whim)が伴う場合は容認されるという。

(20) a. She had a slide on the ice.

b. *She had a slip on the ice.

(ibid.: 467-470)

(21) We had a stroll around the garden while we were waiting for you to get ready.

(ibid.: 474)

また、行為の持続性に関して、この構文は、(22)のように、「ちょっとした間(for a bit)」という概念が感じ取られる場合には容認されるという。

(22) We had a walk in the park.

(cf. ibid.: 474)

では、こうした構文特性はどのように生まれているのだろうか。統語特性については、ゼロ派生名詞の派生前の本動詞文との関係性を考察しなければならぬため、本稿の考察対象からは外して考えたい。そこで、意味特性の発生に焦点を置くことにする。本研究では、意味特性の発生に関し

て、have タイプ軽動詞構文の統合過程と合成構造が大きく関与していることを主張したい。そこで、have タイプ軽動詞構文に関して、統合過程と合成構造を考えると、図10のように描くことができる。

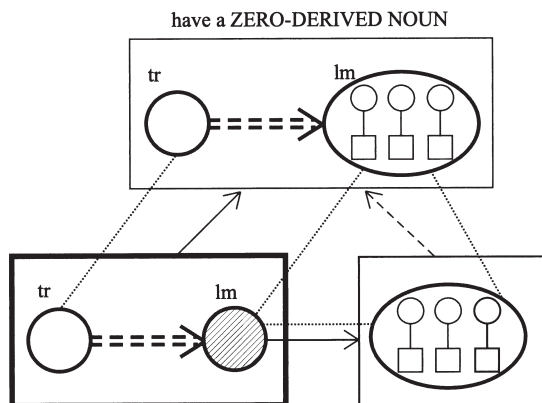


図10：have タイプ軽動詞構文の統合過程・合成構造

まず、成分構造（下部の図）から見よう。下部の左図は、軽動詞 have の意味構造であり、トラジェクター (tr) がランドマーク (lm) を所有する（図中の矢印付き二重波線）ことが示されている。そして、本研究では、この have の意味構造がプロファイル決定詞となり、合成構造に意味を引き継ぐ中心となることを強調したい。ランドマークは、精緻化する必要がある、これは下部の右図によって表されているゼロ派生名詞によってなされる。最終的に、これらが統合され、組み上がった合成構造（上部の図）が have タイプ軽動詞構文の意味構造となっている。

より詳細に図を見てみると、下部の左図の軽動詞 have は、第3節で見た順次的走査を伴う。つまり、have の認知処理では、時間と共に物事を順々にたどっていく走査が行われることになる。さらに、下部の右図のゼロ派生名詞は、第3節の図2の choice₃ のように、プロセスを名詞化したものである。これは、派生前にもともと動詞で表していたプロセス全体

がひとかたまりとなって具現化したモノである。したがって、派生前の動詞で表されていたプロセスが累積的に内在している。下部の右図では、丸(○)と四角(□)を実線で結んだものが出来事の一局面を表しており(第3節の図4, 5の玉が転がるそれぞれの局面に相当)、それらを囲んでいる太線の楕円は、具現化を示している。ゼロ派生名詞には、時間と共に物事を重ね合わせながらたどっていく走査である総括的走査が関わっている。

次に、haveタイプ軽動詞構文の意味構造である合成構造(上部の図)を詳しく見てみよう。基本的な意味構造は、(成分構造の)プロファイル決定詞である軽動詞haveのものを継承おり、順次的走査も引き継いでいる。他方、ゼロ派生名詞は、具現化して総括的走査により処理されるモノとして、ランドマーク(lm)でプロファイルされている。まとめると、haveタイプ軽動詞構文の意味構造というのは、トラジェクター(tr)がゼロ派生名詞としてのモノをランドマーク(lm)として所有するという構造となっている。⁵

また、本研究では、プロファイル決定詞である軽動詞の語彙的意味の側面は、構文全体の意味である合成構造に(ある程度)継承されていると考えている。すなわち、このことは、動詞で表わされる事態を捉える話者の認知プロセスが引き継がれているということの意味する。これは、以下で見るように、この動詞の意味構造が構文全体の意味に影響を及ぼしていると考えているからである。文法化の観点からすると、軽動詞は、完全には意味の希薄化が起っていない段階にある、換言すると、文法化の途中経過にあると考える方が自然ではなかろうか。つまり、このように考えると、語彙の概念内容は薄れていても、話者が捉える認知プロセスは残っているということになる。

この図式からいくつかの構文特性、特に意味特性の予測ができる。たとえば、(16)のように、主語が楽しんでいる行為にふけたり、その行為によって安心感がもたらされるのは、人が物を所有するという行為に伴う性

質の一面として捉えられる。⁶ その理由としては、人は物を所有するという行為に楽しみを感じたり、物を所有することで安心感が得られるからである。さらに、(20)のように、主語が人間で何らかの意志的な行為であるのも、所有の側面から捉えられる。所有というのは、人の意志によってコントロール可能な行為だからである。また、(21)のように、主語のその場で思いつく動機を伴うといった特性も所有構造がもつ特性の一部として説明できる。所有というのは、予め計画性をもって物を所有することもありうるが、その場の動機で所有欲に駆られて物を所有することもあるからである。

他方、(22)のように、ちょっとの間という概念は、ゼロ派生名詞が具現化され有界的(bounded)なモノとして捉えられ、不定冠詞 a によって表示付けされることによって説明可能である。図10で言うと、ランドマーク(lm)が太線の楕円で囲まれていることで示されている。⁷ そして、ゼロ派生名詞にとって何よりも重要なのは、行為の具体的な内容を描写し、それが合成構造にも引き継がれていくということである。これは、トラジェクター(tr)がランドマーク(lm)を所有するという構造において、その所有物であるランドマーク(lm)を精緻化することによってもたらされるものである。

このように、have 軽動詞構文全体の意味というのは、成分構造である軽動詞とゼロ派生名詞の意味構造からもたらされると考えた方が自然である。そして、本稿では、この構文全体の意味は、あくまでもプロファイル決定詞である軽動詞 have のものを継承しながらも(つまり、述部の中心は軽動詞の側にありながらも)、軽動詞と行為の具体的な内容を表すゼロ派生名詞が統合することで「協働」して、合成的な意味が構築されたものである、ということを主張したい。従来の先行研究では、軽動詞構文の述部の中心はゼロ派生名詞であると指摘されていたわけであるが、本稿のような協働の立場を採用しなければ、この構文がもつ構文特性を上手く説明できない。

ただし、すべての構文特性を予測することは難しい。(18b), (19b)のように、主語が特定の時や場所で特定の目的を遂行したり、試みるという意味のものは容認されないというのは、個々の要素には還元できない構文全体のゲシュタルト的意味に含まれている特性であると考えの方が自然であろう。つまり、こうした特性は、構文全体の意味が構築される際に、あるいは、構文全体の意味に基づいて創発したものとして考えることができるわけである。

以上のように、have タイプ軽動詞構文の統合過程・合成構造を考えた際に、一方で、合成構造に含まれているが、成分構造には還元できない構文独自の意味から導かれる特性もあるということ、他方、成分構造の意味から導かれるものもあるということがわかった。従来の先行研究では、軽動詞構文の軽動詞は、意味的に軽いコピュラとされ、述部の中心はゼロ派生名詞にあるとされていた。他方、本研究の分析では、軽動詞も構文全体の意味に一定の貢献を果たしており、それは、成分構造から合成構造へ意味を引き継ぐ際のプロフィール決定詞であるがゆえであることが明らかとなった。したがって、述部の中心はあくまでも軽動詞にあるが、軽動詞構文全体の意味は、話者の事態把握の認知プロセスを反映した軽動詞と行為の具体的内容を表すゼロ派生名詞の協働により構築されたものである、というのが本研究の立場であった。

4.2 take タイプ軽動詞構文の構文特性と統合過程・合成構造

次に、take タイプ軽動詞構文に目を向けてみよう。第1節で確認したように、この構文は、次のような形式をもったものである。

(23) take タイプ軽動詞構文:

SUBJECT take a ZERO-DERIVED NOUN

まず、統語的特性から見よう。Dixon によれば、このタイプの構文のゼ

口派生名詞は, (24)のように, 派生前に対応する動詞が自動詞であることが中心である。

(24) a. I took a ride (on the elephant).

b. I rode (on the elephant).

(Dixon 2005: 467)

次に, 意味的特性について見よう。まず, この構文は, (25)のように, 「肉体的試み(physical effort)」の場合に容認されやすいという。

(25) Could you go and take a look at Maggie?

(ibid.: 474)

また, この構文は, (26)のように, 「あらかじめ計画された(premeditated)行為」の場合に容認されやすいという。

(26) We always take a stroll after lunch on Sundays.

(ibid.)

さらに, この構文は, (27)のように, 「ひとまとまりの行為(a single unite of activity)」の場合に容認されやすいという。

(27) We took a walk around the lake.

(ibid.)

最後に, 上記の例が示しているように, この構文は, haveタイプ軽動詞構文と同様に, 何らかの意志的な行為がなされる場合に容認されやすいという。

以上の構文特性を踏まえて、本研究では、take タイプ軽動詞構文の統合過程と合成構造を図11のように提案する。なお、take タイプの場合も、have タイプの場合と同様に、統語特性については、ゼロ派生名詞の派生前の本動詞文との関係性を考察しなければならないため、本稿の考察対象からは外し、意味特性に絞って議論を進めたい。

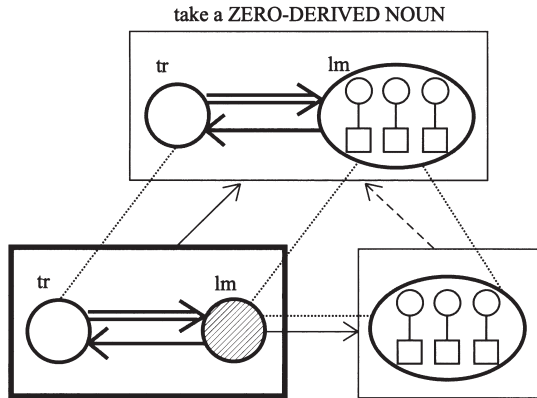


図11：takeタイプ軽動詞構文の統合過程・合成構造

まず、成分構造（下部の図）から見よう。下部の左図は、軽動詞 take の意味構造であり、トラジェクター (tr) がランドマーク (lm) に何らかの力 (図中の矢印付き二重線) を加え、後者を自分の方に引き寄せる (図中の lm から tr に伸びる矢印付き実線) という格好をしている。この take の意味構造は、プロフィール決定詞であり、合成構造に意味を継承する際の意味構造の中心的役割を果たしている。この意味構造では、ランドマークを精緻化する必要があり、それは、下部の右図のゼロ派生名詞によってなされる。これらの成分構造を統合したものが、上部の図の take タイプ軽動詞構文の合成構造である。have タイプと同様に、プロフィール決定詞である take の順次的操作が合成構造にも反映されている。また、ゼロ派生名詞は、具現化され、これは、総括的操作で認識されるモノである。

本研究は、この図式からいくつかの意味特性の予測ができることを指摘したい。まず、この構文は、(25)のように、肉体的試みを伴う行為の場合に容認されるとのことであるが、これは、takeのもつ意味構造に依るものである。takeの意味構造は、トラジェクター(tr)がランドマーク(lm)に何らかの力を加え、後者を自分の方に引き寄せるというプロセスを表しているわけであるから、この力が肉体を伴う力であるということである。また、この構文は、何らかの意志的な行為がなされるということであるが、takeの意味構造からして、力を発し、あるモノを自分の方に引き寄せるという行為は、意志を伴うものであると説明される。さらに、この構文は、あらかじめ計画された行為を表すことが多いとのことだが、これもtakeの意味構造が関与しているからだと考えられる。具体的には、上で見たように、takeには意志性が関与するが、意志をもってある行為を行う際には、あらかじめ計画を練るということも想定されるからである。最後に、(27)のように、この構文はひとまとまりの行為を表すということであるが、これは、具現化され有界的なモノとして捉えられるゼロ派生名詞が、不定冠詞aによって有標化され数えられる対象として解釈されるためであるといえる。そこで「ひと歩き」という印象がもたらされることになる。

以上のように、takeタイプ軽動詞構文の統合過程・合成構造を考慮すると、この構文が有する特性の多くが説明される。そしてここで注意したいのは、haveタイプ軽動詞構文同様に、軽動詞も構文全体の意味に一定の貢献を果たしているということである。つまり、これは、動詞で表わされる事態を捉える話者の認知プロセスが合成構造に引き継がれている、ということの意味する。これは、takeという動詞が成分構造から合成構造へ意味を引き継ぐ際のプロファイル決定詞であるがゆえということになる。そして、このtakeは、軽動詞だとしても、軽動詞haveと同様に、完全には意味の希薄化が起っていない段階にある、つまり、文法化の途中段階にあると考える方が自然である。この構文では、takeの語彙の意味や

その事態を捉える話者の認知プロセスが構文特性の一部に責任を負っていることになる。そして、ゼロ派生名詞も具体的な行為の内容を描写し、構文全体の意味に彩りを加えている。最も重要なことは、話者の事態把握の認知プロセスを反映した軽動詞 take と行為の具体的内容を表すゼロ派生名詞の協働により、この構文全体の意味が構築されているということである。

4.3 give タイプ I 軽動詞構文の構文特性と統合過程・合成構造

次に give タイプ I 軽動詞構文を考察してみよう。第 1 節で確認した通り、この構文は、次のような形式をもったものである。

(28) give タイプ I 軽動詞構文:

SUBJECT give INDIRECT OBJECT a ZERO-DERIVED NOUN

この構文では、統語特性よりも、意味特性がより重要となる。まず、この構文は、(29)のように、主語が「思いつき(whim)」により、「特定の時や場所」で「特定の目的を遂行したり、試みたりする」という場合には容認されないという。

(29) a. *She gave him look all day.

b. *I gave the car push all the way home.

c. *I gave the child a carry to town.

(ibid.: 470)

次に、この構文は、(30)のように、「ちょっとの間(for a bit)」という概念や「ひとまとまりの行為(a single unit of activity)」を表す場合には容認されるという。⁸

(30) a. Go on, you give it a punch.

b. You give the rope pull.

(ibid.: 471)

また、この構文は、(31)のように、主語が人間で、何らかの「意志的 (volitional) な行為」がなされる場合に容認されるという。

(31) He gave her a bump (on purpose).

(ibid.)

さらに、この構文は、(32)のように、主語から間接目的語にモノの移動があり、間接目的語が何らかの影響を受ける場合に容認されるという。この文には、メアリーがジョンを見た結果、ジョンはメアリーの視線に気がついたという意図が感じられるという。⁹

(32) Mary gave John a look (through the window).

(ibid.)

最後の特性として、この構文は、(33)のように、間接目的語が人間ではなく、「無生物」の場合も容認されるが、必ず間接目的語が何らかの点で影響を受けているという概念が含まれているという。

- (33) a. give the table a wipe (it was dirty before and is now clean)
b. give the door a kick (say, to break it down)
c. give the rope pull (to tray to dislodge the end from where it is trapped)

(ibid.: 472)

以上の構文特性を踏まえて、本論では、give タイプ I 軽動詞構文の統

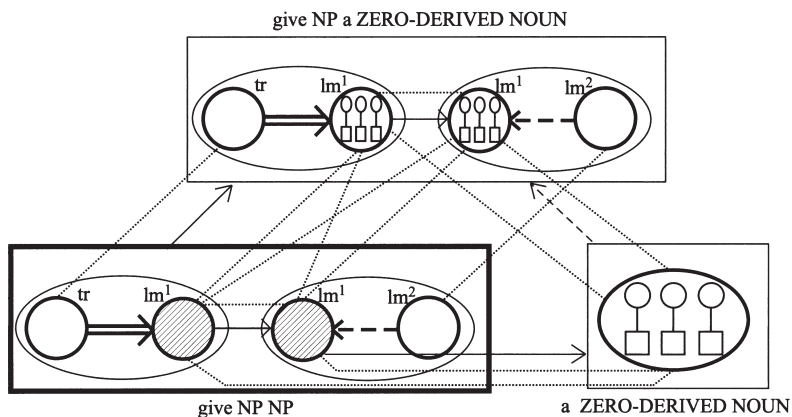


図12: give タイプI 軽動詞構文の統合過程・合成構造

合過程と合成構造を図12のように提案する。

まず、成分構造（下部の図）から考察する。下部の左図は軽動詞 give の意味構造である。ここでは、トラジェクター (tr) が同じ支配域（図中の tr と lm¹ を囲む楕円）にある直接目的語に当たるランドマーク¹ (lm¹) に何らかの力を加え（図中の矢印付き二重線）、それを間接目的語に当たるランドマーク² (lm²) の支配域（lm¹ と lm² を囲む楕円）に移動させ（図中の lm¹ 同士を結ぶ矢印付き実線）、所有させる（図中の lm² から lm¹ に伸びる矢印付き波線）という構造が描かれている。¹⁰ この意味構造では、ランドマーク¹ を精緻化する必要があり、それは、下部の右図のゼロ派生名詞によってなされる。これらの成分構造を統合したものが、上部の図の give タイプI 軽動詞構文の合成構造である。この構造では、トラジェクター (tr) が（出来事名詞である）イベントを表すゼロ派生名詞のランドマーク¹ (lm¹) に何らかの力を加え、それを間接目的語に当たるランドマーク² (lm²) の支配域にもたらし影響を被らせることが描かれている。have タイプや take タイプ同様に、プロファイル決定詞である give の順次的操作が合成構造にも反映されている。またゼロ派生名詞は、具現化され、これは、総括的操作で認識されるモノである。

このような意味構造から、この構文の意味特性のいくつかが説明される。まず、この構文では、主語が人間で、何らかの意志的な行為を表す場合に容認されるが、それは、軽動詞 give の一側面の意味にあると考えられる。具体的には、主語自身が自らの支配域からランドマーク¹(lm^1)に何らかの力を加え、それをランドマーク²(lm^2)の支配域に移動させ、所有させるという、give 自体がもついわばくモノの移動>とく所有>の側面は、人間が意志的に操作する概念だからである。

また、間接目的語で記号化されるものが何らかの影響を受けるのは、同じくくモノの移動>とく所有>の側面から捉えられる。この点は、次の興味深い事例からも明らかである。

(34) a. *Mary gave a look to John.

b. *give a kick to the door

give タイプ I 軽動詞構文は、(34)のように、いわゆる与格交替を起こさないことが多い。これは、to 与格構文(*to*-dative construction)が二重目的語構文とは異なる意味の側面を喚起することに起因する。to 与格構文では、くモノの移動>の概念しか喚起されず、く所有>の概念までは想起させない。たとえば、(34a)のように、メアリーがジョンを見て、ジョンは視線を感じないことはありえないし、また、(34b)のように、ドアを蹴って、そのひと蹴りがドアに届かないということはないからこれらの文は容認されない。したがって、give タイプ I 軽動詞構文において、主語の(支配域)から移動されたモノ(具体的には、行為)は必ず間接目的語が所有し、その結果、間接目的語で記号化されるものが何らかの影響を受けるということは、自然な成り行きであるといえる。また、通常二重目的語構文では、間接目的語として想起されるものは、ふつう、人間である。しかし、(33)で見たように、give タイプ I 軽動詞構文では、間接目的語は、無生物でも記号化されることも容認されている。これは、く所有

>の意味が変容し、<モノの移動>に伴って間接目的語で言語化される（人間でも無生物でも）実体に何らかの<影響>が及ぼされれば良いというを示している。したがって、この特性は、give タイプ I 軽動詞構文に特有で独自の意味ということになる。

さらに、この構文は、(30)のように、ちょっとの間という概念やひとまとまりの行為を表す場合に容認されるというのは、具現化され有界的なモノとして捉えられるゼロ派生名詞が、不定冠詞 a によって有標化され数えられる対象として解釈されるためであるといえる。この点は、これまでの have タイプ、take タイプと同じである。

しかしながら、この意味構造から、すべての構文特性を予測することはできない。この構文は、(29)のように、特定の時や場所で特定の目的を遂行したり、試みたりするという場合には容認されないというが、このことは、成分構造である軽動詞 give やゼロ派生名詞に還元される要因というよりも、give タイプ I 軽動詞構文全体がもつゲシュタルト的意味として捉える方が自然であろう。

以上のように、give タイプ I 軽動詞構文の統合過程・合成構造を考慮すると、構文特性の多くが説明可能となる。そして、have タイプやtake タイプと同様に、成分構造である軽動詞 give がプロフィール決定詞であるがゆえに、それがこの構文の意味構造となる合成構造に大きな影響を及ぼしていることがわかる。つまり、これは、have タイプやtake タイプと同様に、動詞で表わされる事態を捉える話者の認知プロセスが合成構造に引き継がれている、ということの意味する。そして、軽動詞 give は、have タイプやtake タイプと同様に、文法化の途中の過程にあり、語彙の意味やその事態を捉える話者の認知プロセスが完全に消失してはいないと考える方が自然である。つまり、この構文では、give が有する語彙の意味が構文特性の一部に反映しており、構文全体の意味の発生に大きく関わっていることになる。また、ゼロ派生名詞は、具体的な行為の内容を表しており、これもこの構文の意味構造に大きく貢献してい

る。やはり重要なことは、話者の事態把握の認知プロセスを反映した軽動詞 give と行為の具体的内容を表すゼロ派生名詞の協働により、この構文全体の意味が構築されているということである。

4.4 give タイプ II 軽動詞構文の構文特性と統合過程・合成構造

最後に、give タイプ II 軽動詞構文を概観しよう。第1節で確認した通り、この構文は、次のような形式をもったものである。

(35) give タイプ II 軽動詞構文:

SUBJECT give a ZERO-DERIVED NOUN

この構文は、“give a cry” や “give a laugh” のように、間接目的語を表現しない（つまり、プロファイルしない）ものであり、give タイプ I からの拡張例として捉える方が自然である。そこで、give タイプ II 軽動詞構文の統合過程と合成構造を図13のように提案したい。

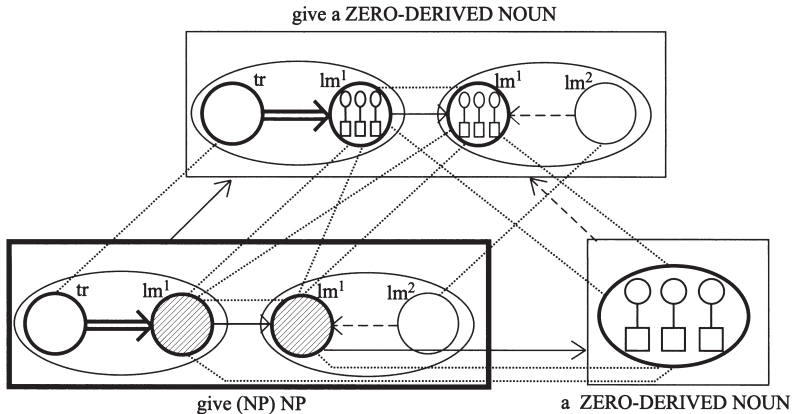


図13: give タイプ II 軽動詞構文の統合過程・合成構造

give タイプ I との大きな違いは、下部の左図の成分構造において、ラ

ンドマーク²(lm²)が特定化されておらず、プロファイルされていないという点にある。この他の意味構造は、give タイプIと同じである。具体的には、トラジェクターが同じ支配域にある直接目的語に当たるランドマーク¹(lm¹)に何らかの力を加え(図中の矢印付き二重線)、それをプロファイルされていないと表現されていない間接目的語に当たるランドマーク²(lm²)の支配域に移動させ(図中のlm¹同士を結ぶ矢印付き実線)、所有させる(図中のlm²からlm¹に伸びる矢印付き波線)という構造が描かれている。ただし、ランドマーク²(lm²)がプロファイルされていない(ゆえに、細線で表示)から、〈モノの移動〉は明確であっても、〈所有〉の概念は希薄化して捉えられる。ゆえに、〈モノの移動〉に伴って及ぼされる何らかの〈影響〉も希薄化して解釈される。ただし、希薄化してはいても、完全には消えておらず、背景(つまり、前景となるプロファイルに対して背景となるベース)には存在しているので、give タイプIとほぼ同じ意味構造が得られることになる。よって、give タイプIIも、成分構造である軽動詞 give には、その事態を捉える話者の認知プロセスが反映されており、プロファイル決定詞であるがゆえに、それがこの構文の意味構造の構築に大きな役割を果たしていることがわかる。同時に、ゼロ派生名詞は、具体的な行為の内容を表しており、これもこの構文の意味構造に貢献している。よって、このタイプの構文も、軽動詞とゼロ派生名詞が協働することによって、構文全体の意味が構築されると説明される。

4.5 軽動詞構文のカテゴリー化とネットワーク

これまで、軽動詞構文をめぐって、具体事例として have タイプ軽動詞構文、take タイプ軽動詞構文、give タイプI 軽動詞構文、give タイプII 軽動詞構文を考察してきた。具体的には、それぞれの構文特性から構文の統合過程・合成構造を見ることで、各構文の意味構造を明らかにしてきた。この節では、これまでの議論のまとめとして、第3節で見たカテゴリー化とネットワークの観点から軽動詞構文を考察したい。

第3節で見たように、あるカテゴリーは、典型例となるプロトタイプと、その拡張例、そして、それらから抽出されるスキーマからなる。これまで見てきた軽動詞構文の実例の考察から、それらに共通する性質を抽出した軽動詞構文のスキーマの意味構造は、図14の上部の図のように示すことができる。また、その成分構造は下部の図で示されている。具体的な統合過程において、まず、成分構造でプロファイル決定詞となる軽動詞（下部の左図）が意味構造の中心となる。この構造では、トラジェクター(tr)がランドマーク(lm)に何らかの力を発することが示されている。この構造は、各軽動詞を抽象化したスキーマ的構造である。特に、各軽動詞の文法化の進度に応じて、それぞれの動詞に含まれている話者の事態把握の認知プロセスを反映した語彙的意味が合成構造に引き継がれていく。同時に、軽動詞がもつ順次の走査も継承されていく。他方、ランドマーク(lm)は、具体的なモノを精緻化することを示しており、それはゼロ派生名詞（下部の右図）でなされることが描かれている。このゼロ派生名詞は、行為の具体的内容を描写しており、それが合成構造にも拡張的に組み込まれていくことになる。最終的には、軽動詞の意味構造とゼロ派生名詞の意味構造が統合し、合成構造として軽動詞構文の意味構造（上部の図）が構築されることになる。

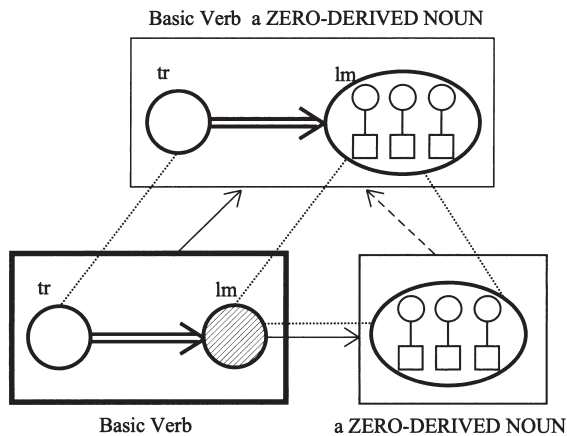


図14：軽動詞構文のスキーマ

ここで重要なことは、2点ある。1つは、プロフィール決定詞である軽動詞は、構文全体の意味の構築において、中心的な役割を果たすということである。したがって、軽動詞構文は、軽動詞の話者の事態把握の認知プロセスを反映した語彙的意味の一部や特性を継承していることになる。また、第2節で概観したように、Curmeのいう軽動詞構文の「具体性」というのは、ゼロ派生名詞のイベントが具現化し、有界的に捉えられるモノだからである。こうしたゼロ派生名詞の特性も軽動詞構文に引き継がれていく。つまり、軽動詞構文全体の意味の中心は、あくまでもプロフィール決定詞である軽動詞でありながらも、ゼロ派生名詞の特性が構文全体の意味に拡張的に組み込まれていくことになる。ゆえに、軽動詞構文の意味は、軽動詞とゼロ派生名詞の協働によって発生する、ということが重要な点である。もう1つ重要なことは、構文全体の意味を担う合成構造は、個々の成分構造には完全に還元できないゲシュタルト的性質を含むということである。よって、そのゲシュタルト的性質は、構文全体の意味として創発したものであると考えるのが自然である。以上が、軽動詞構文のスキーマの重要な特性である。

以上のことを踏まえて、軽動詞構文カテゴリーのネットワークは、図15のように示すことができる。

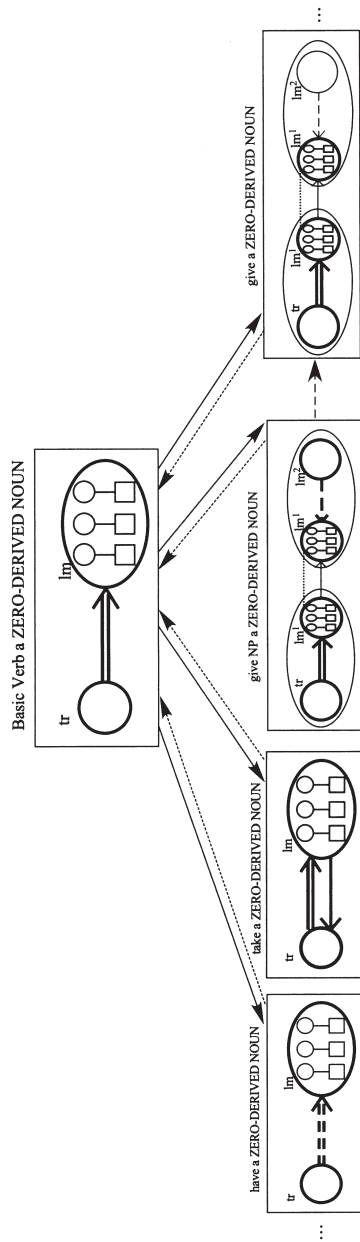


図15： 軽動詞構文のネットワーク

この図から明らかなように、これまで見てきた have タイプ軽動詞構文、take タイプ軽動詞構文、give タイプ I 軽動詞構文は、軽動詞構文カテゴリの具体事例（あるいはプロトタイプの事例）であるといえる。そして、give タイプ II 軽動詞構文は、give タイプ I 軽動詞構文からの拡張例とみなせる。さらに、これらの構文に共通する性質を抽出した（下図の下から上に伸びる「抽象化」を表す矢印付き点線）ものとして、図14の構文スキーマが想定される。¹¹ 従来の先行研究では、これらの構文に共通する軽動詞は意味的に軽いということは論じられてきたが、共通する特性までは述べられてこなかった。本研究では、これらの構文に共通するスキーマを見出すことにより共通性が記述され、ゆえに、これらの構文は、ネットワークを成す1つのカテゴリーを形成していることを示した。

4.6 軽動詞構文の軽動詞とゼロ派生名詞が構文全体の意味に及ぼす貢献度をめぐって—軽動詞とゼロ派生名詞の「協働」に向けて—

本論の締めくくりとして、軽動詞構文の軽動詞が構文全体の意味に及ぼす貢献度について考察したい。第2節では、軽動詞に関して、従来の伝統文法・記述文法の見解を見た。そのまとめをここに再掲する。

(36) 従来の研究の「軽動詞」に関するまとめ: 軽動詞構文の軽動詞は、意味的な貢献度が低く、ゆえに、意味的に「軽い」ものである。むしろ、この構文の真の述語は、ゼロ派生名詞にあり、これがこの構文の意味に大きく貢献している。

((12)を再掲)

しかし、本研究の分析から明らかなように、いずれの事例でも、統合過程において、成分構造である軽動詞の果たす役割は大きいことを見てきた。いずれの事例においても、成分構造において、軽動詞はプロファイル決定詞として機能し、統合過程を通じて、その基本的な意味構造を合成構

造に引き継ぐ役割を果たす。それは、単に順次的走査といった認知プロセスを引き継ぐだけに留まらない。むしろ、これまで見てきたように、軽動詞の事態を捉える話者の認知プロセスといった語彙の意味を含む意味構造が構文全体の意味に貢献し、構文に制約を課している側面もある。もちろん、ゼロ派生名詞の役割も重要である。ゼロ派生名詞は、出来事名詞として、行為の具体的内容を表す。そして、ゼロ派生名詞は、軽動詞の意味構造のランドマークを精緻化し、イベント内容を詳述化する役割を果たす。よって、ゼロ派生名詞が構文全体に与える意味も大きい。本稿が主張したいのは、従来の先行研究が述べているように、軽動詞は、文法化に伴い語彙の意味を完全に失い、コピュラのような役割を果たしているというよりも、その事態を捉える話者の認知プロセスを残存している文法化の途中段階にあり、構文全体の意味において、しっかりと役割を果たしている、ということである。

いずれの事例においても、統合過程において、成分構造でプロファイル決定詞である軽動詞の果たす意味的貢献度は小さくなく、軽動詞構文にいくつかのタイプが存在するのは、軽動詞の示す意味特性のためであるといっても過言ではない。もし、コピュラのように、本当に連結的な役割しか果たしていないとすれば、言語発達上、軽動詞構文のバリエーションはもっと少なく済んだことであろう。むしろ、軽動詞には、それぞれ独自の役割があるがゆえに、いくつかのタイプの軽動詞構文が存在するのであろう。図15で見たように、それぞれの軽動詞構文は、まさしくカテゴリー内で生態学的地位を占め、その環境に適したものであるがゆえに、現代英語に生き残っているものであるといえる。よって、(36)のような従来の見解を改め、軽動詞構文全体の意味において、それぞれ重要な役割を果たす軽動詞とゼロ派生名詞が「協働」することで、この構文が構築されていると考える方が自然な言語観ではなかろうか。以下が本研究のまとめである。

(37)軽動詞構文における軽動詞と派生名詞の意味的貢献度: 統合過程において、軽動詞構文の軽動詞は、成分構造で、プロフィール決定詞として機能し、それゆえに、その事態を捉える話者の認知プロセスを含んだ語彙の意味を合成構造に引き継ぐ。他方、派生名詞は、成分構造で、実現される行為の具体的内容を表し、それは合成構造に拡張的に組み込まれる。最終的な構文全体の意味を表す合成構造の意味は、軽動詞の意味構造と派生名詞の意味構造の「協働」により構築される。

5. 結語

小稿では、英語の軽動詞構文をめぐる、認知言語学、特に認知文法の観点から考察してきた。このアプローチが採用する統合過程や合成構造・成分構造からすると、軽動詞構文の軽動詞は、従来からいわれているようにコンピュータのような軽いものではなく、構文全体の意味に貢献する重要な要素であるということになる。そして、ゼロ派生名詞は、出来事名詞として、行為の具体的内容を表すため、これも構文全体の意味に貢献する要素である。従来の研究のように、軽動詞構文の意味は、ゼロ派生名詞に中心があるというよりも、本稿では、軽動詞とゼロ派生名詞の「協働」により、軽動詞構文全体の意味が構築されていくと考える方が自然な言語観であることを提案した。小稿では、共時に基づく分析法を採用した。本研究の主張を論証するためには、軽動詞の文法化などを含めた通時的側面も慎重に検討する必要がある。この点に関しては稿を改めて議論したい。

<注>

* 小稿は、平成30年度函館英語英文学会研究発表会（2018年12月1日 於：北海道教育大学函館校）にて口頭発表（題目：「英語の軽動詞構文の動詞の意味は本当に軽いのか？－認知文法による軽動詞構文の一考察－」）したものに大幅な加筆・修正を施したものである。上山恭男先生（北海道教育大学函館校）と濱田英人先生（札幌大学）には大変貴重な

ご意見を頂いた。ここに記すことでお礼を申し上げたい。なお、本稿に不備があるとすれば、それはすべて著者の責任である。

- 1 これらのタイプの他にも、make や do を用いた軽動詞構文など他の種類のものもあるが、本稿の射程外である。この点を含めた考察は、稿を改めて議論したい。また、これらのタイプと make や do を用いた軽動詞構文の違いは、村田(2005)にて論じられているので参照されたい。
- 2 認知言語学では、「構文(construction)」は「形式と意味のペア(form-meaning pairing)」として規定され、このパラダイムを採用する本稿でも、同様の見解である。ここで「便宜的」としているのは、本来、形式と意味の結びつきを証明してからでなければ、正確には構文とはいえないはずだからである。
- 3 この点において、Jespersen は、軽動詞構文がいわゆる「同族目的語構文」と並行する性質を示すと述べている。

“They thus in some way form a parallel to those with a ‘cognate object’ [...]”

(Jespersen 1954: 117)

つまり、“have a quiet smoke” (cf. *ibid.*)といった軽動詞構文のゼロ派生名詞句は、“fight the good fight” (*ibid.*)といった同属目的語構文の同属目的語と並行的であり、付加詞の形で記述的な描写特性を付け加えるという機能を有しているということになる。葛西(2003)は、同属目的語を「追加表現(afterthought)」の一種として扱っているが、これに基づきJespersen の考えに沿うとすれば、軽動詞構文のゼロ派生名詞も追加表現という扱いなるのかもしれない。

- 4 英文法書として定評のある江川(1991)も、本稿でいう軽動詞構文は、「名詞中心の表現」という項目に分類されている。
- 5 本稿では、プロファイル決定詞を軽動詞の側に想定しているが、従来の先行研究の分析のような立場をとれば、軽動詞は語彙の意味が希薄化したコピュラであるため、ゼロ派生名詞の側にプロファイル決定詞があ

ることになる。しかしながら、そのような分析では、これ以降で見えていく構文特性を上手く捉えきれない。軽動詞にも（ある程度）語彙的意味が残されており、つまり、動詞で表わされる事態を捉える話者の認知プロセスを読み取ることができ、この意味構造から構文の特性が発生していると考えた方が自然であるというのが、本稿の立場である。この立場を採用すれば、軽動詞構文には、いくつかのバリエーションがあり、それぞれに話者の認知プロセスが反映した独自の構文特性があることを上手く説明できると考えるからである。

- 6 これは、より正確にいうと、have のもつく所有>フレームからもたらされるものである。フレームとは、Fillmore (1982, 1985など)のフレーム意味論の概念である。
- 7 より正確を期するためには、図式内で、不定冠詞 a の存在を描かなければならないが、煩雑さを避けるために省略している。認知文法では、不定冠詞は、グランディングに伴うグランディング要素の一種として考えられている。グランディングに関しては、Langacker (2008など)を参照。
- 8 Dixon は、これらの構文と対応する have タイプ軽動詞の実例を比べている。

- a. Go on, you have punch of the punchball now.
- b. You have a pull of the rope.

(Dixon 2005: 471)

Dixon によれば、a はまあまあの長さの時の間(for a reasonable period of time)続く行為であるといい、他方、b は数分の間ロープを引いている(pulling for a few minutes)という。これは、give タイプ軽動詞構文の特性と逆のものであるが、本研究では、これを導いている要因は、やはり have という動詞の一側面にあると考える。つまり、<所有>するという行為には、ある程度の時間を伴うという私たちの百科事典的知識に依るといえる。

⁹ 一方、下の例のように、have タイプ軽動詞構文にはそのような意図が感じ取られないという。

a. Mary had a look at John (through the window).

(Dixon 2005: 471)

¹⁰ この時点では、いわゆる二重目的語構文(ditransitive construction)と同じ振る舞いをしている。二重目的語構文では、〈モノの移動〉と同時に〈所有〉のフレームが喚起される。

¹¹ 軽動詞構文には、make や do などを用いた他のタイプの構文もあることを示すために、図中では、「…」という記号を用いてそれを描いている。

<参考文献>

相沢佳子. 1999. 『英語基本動詞の豊かな世界』 東京: 開拓社.

Bolinger, Dwight. 1977. *Meaning and Form*. London and New York: Longman.

Curme, George O. 1931. (Maruzen Asian Edition.) *Syntax*. Tokyo: Maruzen.

Curme, George O. 1935. (Maruzen Asian Edition.) *Parts of Speech and Accidence*. Tokyo: Maruzen.

Dixon, R M. W. 2005. 2nd ed. *A Semantic Approach to English Grammar*. New York: Oxford University Press.

江川泰一郎 1991. 『英文法解説』 第3版. 東京: 金子書房.

Fillmore, Charles J. 1982. "Frame Semantics." The Linguistic Society of Korea (ed.) *Linguistics in the Morning Calm*. 111-137. Seoul: Hanshin Publishing Company.

Fillmore, Charles J. 1985. "Frames and the Semantics of Understanding." *Quaderni di Semantica*. Vol. 6. No. 2.

Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum. 2002. *The Cambridge*

- Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Jespersen, Otto. 1954. *A Modern English Grammar on Historical principles*. Part VI: Morphology. Copenhagen and London: George Allen & Unwin Ltd.
- 葛西清蔵. 2003. 『『文型』再考(1): 「追加表現」と「語順の圧力」』『札幌大学総合論叢』第15巻. 1-15.
- Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar*. Vol.1. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar*. Vol.2. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 1990. *Concept, Image, and Symbol*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. 1995. "Viewing in Cognition and Grammar". In: Philip W. Davis (ed.) *Alternative Linguistics*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Stanford: Stanford University Press.
- 村田勇三郎. 2005. 『現代英語の語彙的・構文的事象』東京: 開拓社.
- Poutsma, H. 1926. *A Grammar of Late Modern English*. Part II: The Parts of Speech. Section II: The Verb and the Particles. Groningen: P. Noordhoff.
- Quirk et al. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- 對馬康博. 2017. 「記号的文法観としての認知文法の思考法—言語の記号的側面の再考—」『藤女子大学文学部紀要』第54号. 57-98.
- Wierzbicka, Anna. 1988. *The Semantics of Grammar*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

<辞典>

荒木一雄(ほか). 1999. 『英語学用語辞典』 東京: 三省堂.

Matthews, P. H. 2007. 2nd ed. *Oxford Concise Dictionary of Linguistics*. Oxford: Oxford University Press.

寺澤芳雄(ほか). 2002. 『英語学要語辞典』 東京: 研究社.